

設備投資をめぐる諸課題 —低迷の背景と各種の実証分析—

花 崎 正 晴

目 次

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 投資の多様化 |
| 2. 近年の設備投資動向 | 5. 設備投資行動に関する実証分析 |
| 3. 設備投資のグローバル化 | 6. 終わりに |

高度成長期には日本経済を牽引した設備投資は、近年低迷している。その背景の第一は、日本企業による海外での設備投資の増加であり、第二はM&AやR&Dといった設備投資以外の投資的支出の増加である。いかにして国内の設備投資を増加させることができるかが、日本経済にとって重要な課題である。

1. はじめに

周知の通り、1950年代後半から70年代初頭にかけての日本の高度成長期に日本経済を力強く牽引したのは、企業の設備投資であった。まさに、「投資が投資を呼ぶ」経済成長が、長期にわたって持続したのである。その後70年代における二度のオイルショックや固定為替相場制から変動為替相場制への移行などにより、企業を取り巻く経営環境は激変し、設備投資の伸びは大幅に鈍化した。しかし、80年代に入って設備投資は再び増勢を回復し、名目GDPに占める設備投資の比率はバ

ブルの絶頂期であった90年度には20.4%と、高度成長期以来の20%の大台超えを記録した。

しかしながら、バブル期に増勢を回復した設備投資は、90年代初頭のバブル崩壊とともに、一転急落することとなった。しかも、その設備投資の低迷は長期化し、最近時点における設備投資の水準は、いまだ91年度のピーク時に遠く及ばない低水準にある。

本稿では、近年の設備投資動向を概観するとともに、その低迷の一因ともなっている投資行動のグローバル化や多様化について考察し、設備投資に関する実証研究を紹介する。



花崎 正晴 (はなざき まさはる)

一橋大学大学院経営管理研究科教授。1979年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。一橋大学経済研究所助教授、日本政策投資銀行設備投資研究所長等を経て、2012年4月より一橋大学大学院商学研究科教授、18年4月より商学研究科が経営管理研究科に改組、名称変更。早稲田大学博士(経済学)。主な著書に『企業金融とコーポレート・ガバナンス』(東京大学出版会、08年、第50回エコノミスト賞受賞)等がある。